allcinema

東への道（1920）

WAY DOWN EAST

メディア 映画
ジャンル ドラマ
製作国 アメリカ
色彩 B&W
時間 108分
初公開日 1922/05
公開情報 劇場公開

【解説】

「イントレランス」「國民の創生」とはまた違ったグリフィスの清教徒的側面を覗かせる、「大疑問」などと同系列の小市民メロドラマだが、そうは言っても、凍河が砕けて流れる氷ともどもヒロインのギッシュが滝に落ちなんとする、活劇調の大クライマックスは用意されている。ニュー・イングランドの片田舎に母と住むアンナは、生活に困って頼った富裕な縁者トレモントの屋敷で知りあった遊び人のレックス・サンダースに結婚をダシに騙され、体を求められた挙句、捨てられる。やがて彼の子を宿したアンナは人知れず僻村で出産するが、すぐにその子を病死させてしまう（洗礼を受けなければ地獄に落ちると陰険な家主に言われ、自ら赤児に洗礼を施す場面は泣かせる）。そして、虚脱状態でそこを後にし、近くの村に職を求める。グリフィスが理想化して描いた、そのバートレット村は、慎み深い郷主をはじめ、気立てのよい連中ばかり住んでおり、レックスの非道とは対称的である。前にも伏線的挿話が語られ、郷主の息子デヴィッド（バーセルメス）は、いわゆるグリフィス的霊感というヤツで、アンナの予知夢もみていた。彼はアンナを“運命の人”ということで慕うが、彼女は“過去”ゆえにそれを受けつけない。やがて、同地に別荘を持つレックスが再び彼女の前に姿を現わし、陰険な女大家も編物の集会で訪れて、アンナの古傷は白日の下に晒されるのだが……。とにかくストーリー的には大新派なのに、どうして今観てこうも新鮮かと思うが、それは一途に“愛の奇跡”を尊重するグリフィスの乙女チックな信念と、こんな話にうってつけのヒロイン、ギッシュの可憐さのお蔭。スペクタクル場面はまるでマンガだが、最高のカタルシスを与えてくれるだろう。

【クレジット】

監督	Ｄ・Ｗ・グリフィス	D.W. Griffith
製作	Ｄ・Ｗ・グリフィス	D.W. Griffith
脚本	アンソニー・ポール・ケリー	
撮影	Ｇ・Ｗ・ビッツァー	G.W. Bitzer
	ヘンドリック・サートフ	
	ポール・Ｈ・アレン	
音楽	ルイス・シルヴァース	Louis Silvers
出演	リチャード・バーセルメス	Richard Barthelmess
	リリアン・ギッシュ	Lillian Gish
	メリー・ヘイ	
	ノーマ・シアラー	Norma Shearer

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.